

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」（平成28年度第2回研究会）

日時：平成28年7月2日（土曜日）午後1時30分より午後5時30分

場所：AA 研301室等

出席：梶、角谷、古閑、小森、河内、塩田、若狭、牧野、阿部、高村、仲尾、澤田、品川  
報告タイトルと報告者氏名・所属

1. 「ハウサ語の声調概観」  
塩田勝彦、共同研究員（大阪大学非常勤講師）
2. 「ベンデ語のトーン類型」  
阿部優子 共同研究員（東京外国語大学 AA 研）

1. 「ハウサ語の声調概観」  
塩田勝彦、共同研究員（大阪大学非常勤講師）

ハウサ語には高(H)低(L)二つのレベルトーンと、一つの降り(F)カンタートーンがあるが、データによるとFが音声環境によってH、Lに変化する傾向が見られ、また昇りのカンタートーンの表出を許さないことから、カンタートーンを好まない特徴があると見られる。この特徴は方言形において顕著となり、ハウサ語の変化に一定の方向性をもたらすものとして注目すべきである。

F 声調を特徴付けるものとして、分節音素、具体的には二重母音 ai の表出形に一定の影響を及ぼすことなどもあげられる。

ハウサ語の声調は語彙項目の弁別だけでなく、さまざまな文法機能を担う点で特徴的である。声調が関与する文法機能は、複数名詞の形成、動詞の命令形、異なるクラスの動詞派生、動名詞形成、場所名詞と行為者名詞の派生、名詞からの副詞派生、TAM マーキングなど多岐にわたる。

動詞や名詞の派生は、接辞と一定の声調パターンによって規定される例が多く見られる。声調パターンは、例えば1級動詞の場合 HLH という三つの連続が基本となり、左側からパターンに統合され、多音節語の場合はパターン左端の H が語頭方向に延長される。名詞の場合は右端からパターンに統合され、多音節語の場合は左端の声調が語頭方向に延長される。

非派生語の声調パターンには語の種類と関連づけられる一定の特徴があり、2音節語の場合 HL、LH、HH、3音節語の場合 HLH、HHL、LHL、LHH が最も多く、それ以外の声調パターンを持つ語は、複数形、女性名詞などの派生語や、外来語などが多い。

## 2. 「ベンデ語のトーン類型」

阿部優子 共同研究員（東京外国語大学 AA 研）

報告者が調査したベンデ語のトーンについて、類型化を試みた。名詞の引用形および動詞の不定形のトーンから、3種類のパターンが観察されることを示した。3種類のパターンとは、語幹（語根）の最初の音節が H で実現されるもの（H 型）、L で実現されるもの（L 型）、次末音節が H で実現されるもの（Ø 型）である。また、前後に H/L の語をつけて環境を変えることで、特徴がみられるものがある。特に ni（トーンは L）を前接した場合、H 型や Ø 型では、H が 2 つのみ続いて L になるといった特徴がある。ほかにも、動詞の L 型でも派生形を作った場合の H は 2 つのみ連続し L になるといった特徴がある。

また、名詞 Ø 型については、ni を前接した場合、さらに 2 つのパターンがみられる。これは、おおよそ借用語か固有語であるかの違いに起因するものと考えられる。

議論点としては、①この H が 2 音節のみ保たれるという現象を引き起こす原因は何か、②名詞 Ø 型のパターンについては 2 種類を区別し、名詞は 4 パターンとするか否か、③動詞の文法的なトーンにはどんなものがあるのか、④バントゥ祖語と比較した場合、ベンデ語のトーンのパターンは逆転しているが、それを引き起こす原因にはどんなものが考えられるのか、の 4 点である。議論のセッションでは、とりわけ②、④の点について、さまざまな意見、助言が出された。